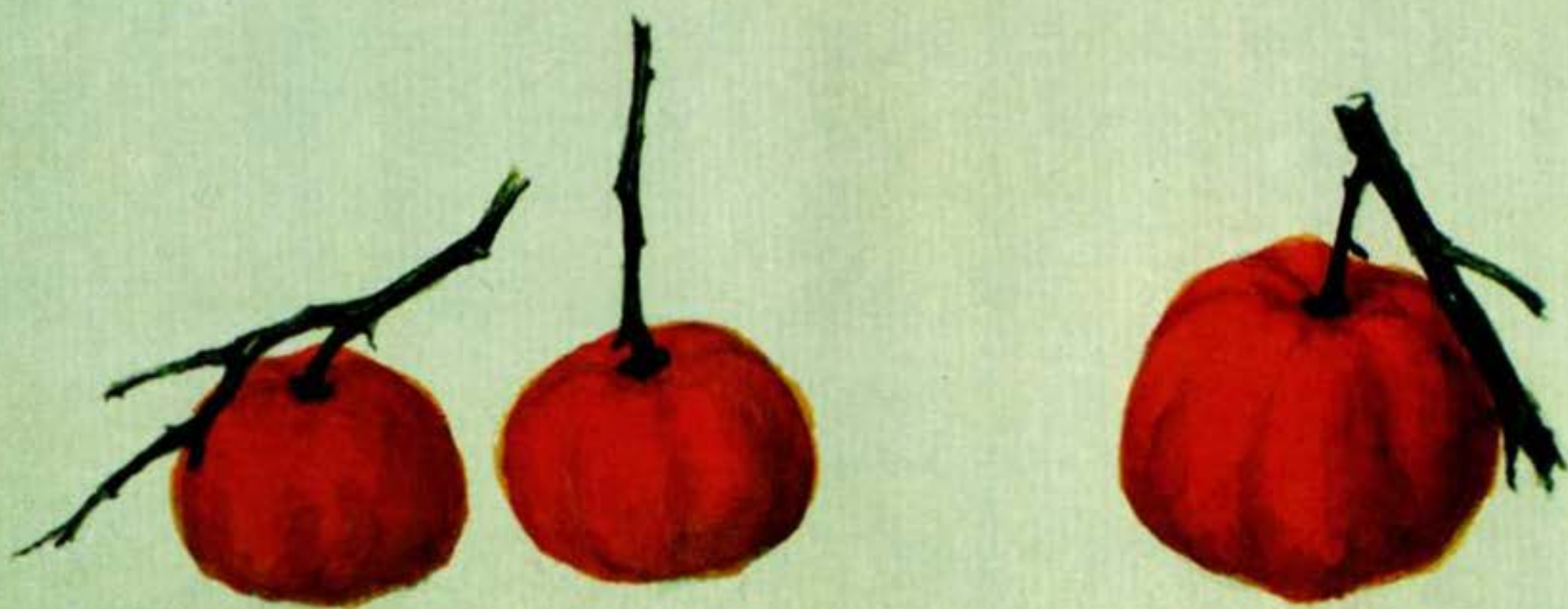


浄土

1978 - 2

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投承認雑誌) 第三二五号
昭和五十三年一月二十五日印刷 昭和五十三年二月一日発行
第四十四卷 第二号



S. Kuz

悔いのない芽を育てよう

寒い。理屈ぬきに寒い。当然のことであるといってしまうえばそれまでであるが、旧臘の暖冬からすれば、一層身に染みる。当然動きはにぶくなりがちであり、炉端が恋しくもなる昨今である。

しかし、寒いとばかりいつていられない。生きぬくためには、この寒さを厭わず、乗りこえる努力をしたいものだ。とはいっても、寒さにかこつけ、逃げ腰な怠け心の芽が出てくる。わけの通らぬ理由をつけ、炬燵にくすぶることになる。



隠れ家や歯のない

声で福は内

一茶

追儼式へ節分を過れば、暦のうえでは立春、春はすぐそこまで来ている。目先のものとごとに捕われがちな人間どもを尻目に、軒先の草木は、来る春に備えてかたい蕾をつけ、

じつと我慢をしている。とき来れば、いっぺんに開かんとする気構え、十分のようだ。

喜怒哀楽を、簡単に口に出して表現できる人間どもとは違い、自然の摂理とおりの繰りかえしとはいえ、そのエネルギーには、改めて感心させられることが多い。

涅槃会や後れて一つ飛ぶ胡蝶 蓼太

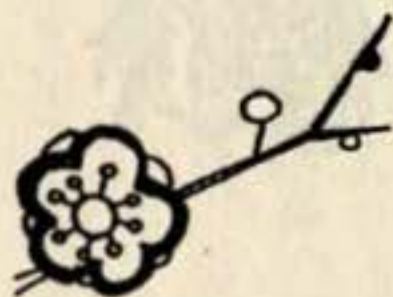
成道の日よりおよそ五十年、人の生きゆく道を説き、自らその範を示した釈尊は、多くのみ教えを遺してこの世を去った。

爾来、二千五百有余年、ひとはそれぞれの時代に、それなりの生きざままで生きぬいてきた。そこには、自然に立ちむかうこともあったろうし、また、迎合したこともあったであろう。そして、この延長上に、いま我々が生きているのである。

子々孫々に、このひとの生きるさまを伝えていくためにも、怠け心の芽をできるだけ早く摘み取り、草木の芽吹く力に負けることのない、すばらしい、悔いのない芽を育てあげ、来る春に備えたいものだ。

(長谷川宣丈)

|| 二 月 号 ||



浄土の教え、時機を叩きて
行運に当るなり、念仏の行、
水月を感じて昇降を得たり
——『選択本願念仏集』

目 次

法 話

涅槃会に寄せて……………北 川 亨 正……(2)

ほとけ心と白楽天……………篠 原 寿 雄……(6)

＜人生読本コーナー＞土俵際……………浅 井 正……(23)

いのちを考える⑩＜生死＞

生と死について……………落 合 時 典 ……(12)

生死事大……………若麻績 侑 孝 ……(16)

別れの悲しみ…………… ……(21)

親鸞から法然へ—縁起・相対性にひかれて— ……大 橋 賢 一……(28)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(11)

お経のページ 勝鬘経……………(36)

＜読者の声＞信仰への道

法然上人の問答から教えを求む④……………吉 村 孝……(32)

＜表紙裏・巻頭言＞悔いのない芽を育てよう……………長 谷 川 宣 丈

念仏ひじり三国志④⑥——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

二 法 話 二



涅槃会に寄せて

きた がわ こう しょう
北 川 亨 正

(長野教区教化団長
佐久市西方寺住職)

○ 讃 題

釈迦牟尼仏初めに法輪を転じて阿若憍陳如を度し、最後に須跋陀羅を度し給ふ。度すべき所の者は皆すでに度し訖って沙羅雙樹の間に於いて將に涅槃に入り給はんとす。是の時中夜寂然として声無し。諸の弟子の為に略して法要を説き給ふ。

右讃題は『仏遺教経』の巻頭の文である。

毎年如月二月を迎えると吾等仏教徒は教主釈迦牟尼如

來の入寂し給うた十五日の涅槃会を思い出すのである。

この涅槃会は仏教徒にとっては、四月八日の降誕会と十二月八日の成道会と共に重要な式典である。

そこで、先づ涅槃という言葉の意味を諒解しておかねばならない。この言葉は梵語のニルバーナを音訳したもので、漢訳では、「滅する」とか「消ゆる」の意味である。唐代以後には、滅・寂滅・円寂などの意味になった。ところが、釈尊の入滅後の仏教思想が変化してくるに随って、涅槃の意味もだんだん複雑になり、釈尊三十五歳の正覺を得て成仏の時即ち有余涅槃と、八十歳入滅の時即ち無余涅槃との二つを立てるようになった。

釈尊は三十五歳ブツダガヤの菩提樹のもとで悟りを開き、サルナートに行き阿若憍陳如等の五比丘を度して仏教の教団を成立させたのである。以後釈尊は絶対自由な境界において法即ち正覺を四十五年間にわたり説法生活をなされたのである。

釈尊が四十五年間にわたる伝導をし、八十歳になり入滅した前後の様子を、『阿含經』を引用して説明する。

釈尊は常侍していた阿難を伴って、ベーサーリの竹林村にて雨安居をされた。その時、世尊に恐ろしき病氣生じ、死に瀕する程の激痛起る。「世尊は正念にして自覺し、悩まされずして苦痛を耐へたまへり」と。また「阿難よ、今や我は老い、衰え、老衰し、老人となり、老齡に達して、我齡八十となれり。譬へば阿難よ、古き車が革紐の助けによりて長らへるが如く、かくの如く阿難よ、惟うに如来の身体も革紐の助けによりて長らへるなり」と言い、有名な自歸依、法歸依の言葉である。即ち、「阿難よ、ここに自らを洲とし、自らを依所として住せよ。他を依所とすること勿れ。法を洲とし、法を依所とし、他を依所とすること勿れ」と。

世尊はベーサーリ附近の沙羅雙樹の下にて、比丘等に

言った。「いざ比丘よ、我今汝等に告ぐ。諸行は壞法なり。放恣ならずして、目的を完遂せよ。久しからずして如来の般涅槃はあるべし。これより三月の後如来は般涅槃すべし」と。更に諸弟子に「我が齡は熟しぬ、我生命は少し。汝を捨てて、我行かん。我によりて自らの歸依はなされぬ。比丘等よ、放恣ならずして正念あり、よく戒を保ちてあれ。よく入定し思惟し、己が心を守護せよ。この法と律とに於て、放恣ならずして住せん者は、生の輪廻を捨てて、苦の終極を致すべし」と。

世尊は更に諸弟子に四大教法を説いたのである。その要旨は、「今予が入滅しても、法と戒と律は存在しておることによつて、予の在世と異なることなく、これをもって汝等の大師とせられよ」と、さとされたのである。その後世尊は一時恢復されて托鉢をなされたのである。更に經には、世尊は阿難を伴いて、バーバー城に入り、鍛工の子であるチュンダの心からなる施食を食されたのであるが、その中に茸があり、それを食した為に重き「赤痢」の病になり、赤き血迸り出で死に瀕する程の激痛が起したがよく苦痛を耐えたのである。その時世尊は阿難に「予はクシナガラに行きたい」と言ったのである。世尊は

歩行困難になった為に、路より離れて、一樹の下に行き、我は疲れたりと言ひ、上衣を四重に敷かせて、その上にやすまれた。

その時世尊は非常に渴を覚え「阿難よ、水をのみたい、水を運び来たれ」と言われたが、あいにく水が濁つていて飲むことが出来ない。丁度五百の車の過ぎた後に、また水少なき故飲む水がなくこまっていたが、非常に渴していた為か三度まで仰せられたので、阿難は諸弟子と共にカクツター河の畔まで案内した。

そこで阿難は清流を世尊にさしあげ、世尊は沐浴し、心身の氣力やや恢復されたのである。そして世尊はクシナガラウバグッタの沙羅林に行きたいと言つたので諸比丘と共にカシナガラに行ったのである。

その時世尊は「非常に疲労し、横臥したい」といわれたので、沙羅樹の間に頭を北に向けて床を敷き、面を西に向け、足の上に足を重ねて臥されたのである。

世尊は正念し、刻々に臨終のせまることを自覚したのである。諸弟子や随喜の人々は泣き悲しんだのである。その時沙羅雙樹は時ならずして花咲き、凡ての花は満開となり、如来供養の為に如来の軀に散り布き、天の歌謡

は虚空より起こつたのである。

中でも常侍していた阿難が、悲しみのあまり涕泣している姿を見て、「止めよ、阿難よ、悲しむ勿れ、慟哭する勿れ。かねて我、凡ての愛しく好ましき人々とも生別し、死別す。憂へるな。汝は長い間予につかえ安樂にしてくれた。阿難よ、感謝する。これからよく精進し速やかに悟りを得るであらう」と言い終つて、世尊は涅槃し給うたのである。

この日が西暦前四百七十九年二月十五日である。今より二千四百五十七年前である。

さて以上のように世尊入涅槃に到る前後の概略を記したのであるが、私は一昨年二月十日より二十日まで釈尊の四大聖地、即ち降誕の地ルンビユ、成道の地ブッダガヤ、初転法輪の地サルナート、涅槃の地クシナガラを巡拝したので、その中クシナガラの様子を追想し記すことにする。

十四日世尊入滅の地クシナガラ（現在名カシア）に到着。仏教聖典の『阿含經』の中にある、入滅の地クシナガラの一文を無量の感にて読む。前述した如く世尊が説教を続けてこの地に来て、沙羅雙樹の下に床を敷き入滅なされた所で、滅後数多くの堂塔や僧院が建立されたが、現在はその遺蹟が発掘されており、世尊を火葬にした巨大なレンガ積みofラマパルージャ塔があり、その後方の本当に火葬をした所には饅頭形にレンガが積み重ねられていた。その塔の前に立ち『般若心經』を誦誦し、合掌称念した時には、世尊の生涯を追想し感極まって眼底の熱くなるを禁じ得なかった。最後の説法をしたマタクワ寺院には世尊の坐像あり、その前には蓮華の花咲く池あり、世尊在世のことを思い出す。またそこには白亜の寺院があり、大きな体軀に黄色の如法の袈裟をかけたビルマの僧がおり案内をしてくれ、寺内に祀つてある黄色い布がかけてある六メートルに及ぶ涅槃像を拝ましてくれた。全身が金粉で覆われており、金銅仏のように見えるが石仏である。タイ、ビルマからの巡礼者が金箔や金粉を寄進するので黄金色に輝いていたのである。涅槃像の台座には常侍者阿難の弟子となつた須跋陀羅等の悲

しみにみちた姿が彫刻されてあつた。寺院を出て境内地の庭園を見ると、沙羅雙樹が林立しており、記念の為に散り落ちてゐる葉数葉を拾つてスーツの中に大切におさめる。

その宵ホテル主人の好意により広場に薪を沢山積み重さね、恰も十四日逮夜なる故、ホテルの泊り客二十名余広場に出て世尊の荼毘に似せて焚き火をしたのである。虚空には宵の明星と群星輝き、世尊入滅の時もかくやと思ひ、心静かに読經称念合掌し時の経るのも忘れたほどであつた。

仏教は覚醒即ち目ざめである。よく心眼を開いて自己を反省し精進することである。

実に私たちは毎年二月十五日の涅槃会を迎える度毎に釈尊出世を思い出し、永劫不變の教え、即ち法と律と戒を、個人、社会、国家が守つたならば、阿弥陀仏の本願力によってかならず永遠なる極樂世界の平和が出現すると思う。

以上

ほとけ心と白楽天



篠原 壽雄

(駒沢大学教授)

居士が仏教に関心をもつことは、人間性への自覚の高まりである。しかし、この人間性の自覚も、限らない仏智と、その絶対性に対する自覚も、ともに彼のおかれた立場と、その時必相を無視しては考えられない。わたくしは中国のすぐれた文人・白居易(楽天)に禅や仏教が、いかに受容されたか。また、禅信奉者として高名であった彼が、晩年にはなぜ浄土教の信者になったのか。それは回信といえるものであろうが、これらを少しく考えてみたい。

居易は、中国の唐代の人びとが泰平の世の眠りをさま

された安史の乱の七年後、代宗の大暦七年(七七二)に生れた。大乱の平定された後の社会相は、居易の人格形成に大きな影響を与えずはおかないが、今は割愛する。

このころの禅の世界は、南宗禅の色彩がきわめて色こい。この禅風は頓悟といわれ、即心即仏・非心非仏という語に端的にうかがえる。つまり、おのれの心の中だけにこそ仏は求められる。仏は他に求めらるべきではない。求めらるべきものとして、仏があるのではない。また、この心そのままが仏にほかならぬことである。

きびしいこの立場は、馬祖道一(七〇九―七八八)によ

って、あらためて強調された。ところが、馬祖は、居易が師と仰ぎ、また親しく道交を結びあう如満の師であった。馬祖の主体性の強い禪風は如満にうけつがれたことは、異論をさしはさむ余地はないが、居易に与えた感化もまた大きい。このころの人で中国の維摩居士といわれる龐居士（？—八〇八）の名も広く知られるが、この居士も在俗のまま馬祖の門に学び、その法を嗣いだ一人である。南宗の禪風の影響は、ここにもありありと知られよう。

居易自身のことばで比較的若いころの作品から、禪風をしのばせることばを記してみよう。元和五年、居易三十九歳の時の作。

空門の法を学ばずんば、老病死苦の悩みは脱しえられぬ。無生の心を悟得しなければ、白頭になるも夭死したのと同じである。（早梳頭・卷九）

また、杓直に贈る詩（卷六）、元和十年、居易の四十四歳のときの作はいう。

早年には身代をもつて、直ちに逍遙の篇に赴き、近歳は心地をもつて、かえつて南宗の禪に向う。外は世間の法に順うも、心は区中の縁を超脱す。——略——

人世の苦を煩悶を、また憂愁を解決しようと目ざすものは仏教である。まっしぐらに、仏教はこれらの問題ととりくむ。右の詩によって、居易が単に禪語をもつて観念的に詩作しているのでないことが知られる。

このころの作に、すでに禪門の悟りをえているから、心中の愁いは一時に消えうせる、という詩作も見える。

さいわいに禪門のさとりを学び、千愁も万念も一時に空し。（晏坐閑吟、卷十五）

自得の境地は、みごとにうたわれている。また、このような境地は、元和十四年、四十八歳の時の作にもみえる。

菩提は処所なく、文字はもと空虚なり。指を見るは月を知るに非ず、筌を忘れてここに魚を得る。（和

太和六年、自遠禪師という坐禪にて高名な僧の風貌をえがき、この師に一たび会えば直ちにこの処が道場になり、心は静寂になるとうたう。すなわち、

家を出てよりこのかた常に自在、身に縁るは一衲一繩床、人をして見れば即心無事ならしめ、一たび逢うごとに常にこれ道場。(贈僧三・自遠禪師、卷五七)

開成元年になると、居易の自得の境は、さらにひらめきを見せて「送李滁州詩」(卷六六)を作る。「すでに万事空なることをさとしたからには、空に執着すべきではない」という。主体性の強い南宗の禪風がうかがえる。しかし、このころをすぎると、居易の複雑なところが見える。

居易もほかの文人たちと同じように、発心の動機はおのれ一箇の救済が目的であった。自己救済とは、おのれひとりの往生へのねがいである。さて、居易における自己救済、つまり、おのれひとりの人世苦からのがれ、救

われようとするのぞみの高まりを探らなければならぬ。そのことは居易が浄土教に示した関心によってうかがうことができる。

壮年時代の詩には、浄土教系の思想を感じさせるものは見あたらないが、江州におった元和十三年(四十七歳)、果上人の歿する時の詩、

先ず西方極楽浄土に行つて、その主人とならんことを請うがよい。(卷十七)

と東西二林寺の僧に示したのが見える。太和八年、時に居易は六十三歳、このころになると次にいうように、居易の明らかなねがいが見える。

香を焚き礼をなし大誓願を發し、内宮に生れんことをねがう。……願くはわれ来世、一時に上生せん。

(画弥勒上生幀讀、卷六一)

こののち程なくして作られた「繡西方幀讀並序」(卷六一)にも、浄土を念頭にして詩作している。このよう

な居易の切なる願いは、愛児の阿崔が三歳の命を天にめされるところ悲しいことと無縁ではない。それはおのれの精魂をかたむけた文集の将来を托くすべき者をうしなつた文人居易の慟哭と、焦燥が淡い余韻を奏でつつ伝えられるからである。時に居易は五十八歳。すでに老境に入り、おのれの命を数えるよわいであつた。文集は東林寺・聖善寺、そして蘇州の南禅院に奉納されている。開成六年、六十七巻本を自ら編集しおえて南禅院におさめるときにいう。

わたくしは仏の弟子、ふかく因果の理を信じて、結東の業を懼れ、おのが文集を奉納し、おのがなせる世俗文学、狂言綺語を因にして将来世世、仏乗を讀じて法輪を転ずる縁となさんことを。(巻六一)

このあくる年、開成五年、居易の六十九歳の春には、画家の杜宗敬に三万錢あたえて阿弥陀仏西方浄土の絵をえがかせた。

ねがわくはこの功德もて一切衆生に廻施して、一切

衆生とわれと同様に老いたるもの、病めるものをして、ねがわくは苦を離れて楽をえ、悪を断じて善を修せんことを。(画西方幀記、巻七〇)

とは、いのりをこめた居易のことばである。ほぼ同じころ、本来仏である弥勒の天国の絵もえがかせている。彼においては、このようにすることがおのれが救われる唯一の道であり、必死のねがいであつた。

会昌元年、七十歳の時に「六讃偈並序」(巻七〇)をものした。翌年には、「帰えらば即ちまさに兜率天とそつに帰えるべし」(答客説、巻六九)ともいう。居易が西方浄土に生れかわることを熱望していたことを示すに足る。晩年、なお坐禅を修した居易の精神生活のうちに、新たに浄土を欣求する心境をうかがった。回信といえよう。居易のほとけごろを温く理解したい。

はやくも二十五年も前のことになろう。わたくしは北白川小倉町から居を転じて左京区浄土寺西田町二四番地に住んだ。当時はまだ人通りもさして多くはなく、静か

なたたずまいのうちに、余人を拒絶するほどの静謐さをもっていた。わたくしどもは黒谷さんの鬱蒼とした樹木の梢をながめ、散る花を浮かべ、土手の草を浸しながらゆるやかに流れる疏水沿いに法然院に詣で、南禅寺に遊んだ。

四季いろどりをかえて眼をたのしませる景物が、いつも手のとどく処にあった。比叡の朝やけもみごとであったが、夕映えのころ法然院あたりから西をのぞむと吉田の岡と黒谷の濃緑の樹木だけが見えた。山の緑は入り日とあかねさす空と共演して、たくみに賛歌をうたいあげていた。西に傾いた太陽は山の端にいくすじもの光芒を残し、一面あかね色にかわり、次第に薄墨色にくれていく光景に、わたくしの心は吸いこまれるほどであった。

早朝、また静かな宵、あたりの山々にこだまする美しい梵鐘の余韻は生涯忘れえぬものがある。じようじよう 娼娼とは、美しい形容である。

ときには黒谷さんを通り抜けて平安神宮、栗田口を通り知恩院に詣で、清水までも歩いた。日本の誇る先徳の霊地に茅屋を構え散策した、えにしに深く謝し、先徳を偲び、往いにしころをなつかしむ。

○ご案内

二月に入りまして寒さ厳しい日柄が続きますが、読者の皆様はいかがお過しでしょうか。

さて本誌においても、いよいよ正月号より「浄土句集」のコーナーが開設されることになりました。選者には、ホトトギス同人の一田牛畝先生(福岡市正定寺住職)をお迎えして、誌面の一層の充実をはかりたいと思います。

皆様からのふるってのご投句をお待ちします。

◇要項

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会宛

浄土句集

選者 一田牛畝

福井 田中 栄

ねどこにも初めのこぼれてゐしことを

東京 真野 よし

濡縁に子猫居眠る小春かな

東京 柳川千枝子

腰に手をただ黙々と麦踏める

福岡 前田 秀峰

十夜諷誦つなぐ和讃の声揃ふ

福岡 国友 星畝

おみくじの大吉引きし小春かな

大分 丹羽 難中

尼講の十夜和讃の鉦揃ふ

天井より吊り本山の涅槃像 一田 牛畝

大本山増上寺の涅槃像は巨きく、新築された高い本堂の天井より吊られ、それに本尊さまの灯がときまつられている。

銀飯を供え死囚の初十夜

福岡 尾田 秀童

死囚等の心にひびく十夜鉦

評 教誨堂は十夜会座となり、十夜仏とな

念仏して無量寿光の古稀の春

東京 遠田念悦房

られた阿弥陀仏のお膝元には教誨師がそれぞれ持参した供物と死刑囚が作った菊が供華され、いつもは麦飯であるが今日のお仏飯は銀飯である。

風呂吹きのお斎よばれし開山忌

福岡 高良 慈風

ひとすじに恋し懐しの亡き父母や、先

き立ちし死刑囚のことが十夜鉦うてば、

京都 安藤 寛

ひしひしと臉にうかぶにちがいない。

閉門を遅らす紅葉狩人に

福岡 川辺 蒼山

埼玉 佐藤 泰子

露の身に数珠賜わりし死囚我

遠き鐘きこえて秋の深さかな

いのちを考える

(十)

— 生

死 —

生と死について



おち あい とき のり
落 合 時 典

(第一生命診査医長・医博)

生と死——それは人類永遠のテーマであるが、ここでは些か視点をかえて生と死の間、つまりその境界領域を注目してみたい。私は医師であるから当然、生と死の境目にある病気を問題にするわけだが、その際病人はこの病気を突き抜けることによって初めて生から死へ至るのである。

○

まず歌人、正岡子規の場合だが、彼は肺結核から腰椎カリエスをわずらい、そのため亡くなるまで六年間の長きにわたって病牀に臥すという痛ましきで、その間に書かれた闘病記録や随想は、まとめて『病牀六尺』となったのである。さて、その本の冒頭の一文に

は、「病牀六尺、これ我世界である。しかも此六尺の病牀が余には広過ぎるのである。わずかに手を延ばして畳に触れる事はあるが、蒲団の外へまで足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない……」と、まことに悲惨な境遇がしるされている。

ところでこの『病牀六尺』の現代版ともいうべきものに、作家、外村繁の『阿佐ヶ谷日記』がある。彼は上顎癌のため死の床に臥したのだが、その状況が「方尺記」と題して次のように描写されている。

「昼夜、横になったきりの私には、私の手の届く限りの枕側の一尺平方ばかりの小天地が、私の存在するすべてであるといへる。例えばその小天地に投げ入れられた新聞紙によって、私はかろうじて今日の社会とつながっているわけである。もしも新聞紙が少しでも私の手の届く外に置かれたら、もはや、私にはどうする

こともできないのである……」

ここに描かれた『阿佐ヶ谷日記』や『病牀六尺』の世界は、いずれも健康人には想像もできないほど惨めな世界で、いわばこの世の外とでもいえるようか。ところがそれとは反対に、おなじく死に臨みながら歓喜の感すら覚える場合があるので、次にその例を述べるとしよう。

○

外航船、富浦丸は南支那海を日本へ向かって北上していた。数日前、マレー半島のズングリーン港で鉄鉱石を満載したのである。私はその船にドクターとして乗組んでいたが、突然となりの診療室に患者がかつぎ込まれた。見ると甲板長である。

「甲板長、甲板長……」私は彼のからだを揺り動かしながら呼んだ。だが応答はない。呼吸困難や苦悶の様子は見られない。顔は貧

血気味だが脈拍異常や外傷、出血は見当らない。ただ意識が失われているだけである。

聞くところによれば甲板長は、一等航海士といっしょに船内点検にまわり、たまたま船尾にある広い空室を通過したさい倒れたのである。ところが不思議なことには、そのあとで甲板長を救出すべく降りて行ったセイラーが再びおなじ場所で失神したのである。一体これはどうしたことか。もしかするとその空気に異常があるのかもしれない。有毒ガスか酸素欠乏か？ そのとき船内放送がひびいた。

「手あき総員、船尾へ急げ！」

平穏な航海中に突如として襲ったこの劇的な事件は、一体どのように理解すればいいのか。ともあれ甲板長と行動をとにした一等航海士の体験談をきくとしよう。

この日、一等航海士は甲板長をつれて船内点検に出かけた。懐中電灯を手にあちこちを調べて歩き、いよいよ問題の区画に入った。

すると急に彼は、頭のなかでボーンとしてきたのに気付き、思わずうしろを振り返ると、ついてくる筈の甲板長の姿が見えない。彼は懐中電灯をてらして探した。すると黒い影がライトに写ったが、その影は床にうずくまっていたままだ動かなかった。

「おい、甲板長！」揺り動かしても返事がない。これは大変だ。一体、何が起きたというのだ。かいもく見当がつかないが、一刻もはやく連れ出さなくては……。だが、救助を求めようにも人手がない。やむをえない。自分で背負って行こう。そう決心して腰をかがめたとき、頭がふらふらつとして目先がかすんだ。いまにも倒れそうだ。これはいけない。気持は悪くないが、このままだと自分も参ってしまいそうだ。共倒れになったら大変、まず自分が脱出して助けを求めよう。そう思った彼は、満身の力をこめてマンホールをよじ登った。

それにしても何が原因でこのような事態が

起きたのであろうか。魔の部屋——それは肉眼では何ひとつ異状が認められないのに、一歩足を入れた瞬間から生命は危険にさらされ、脳のはたらきが急速に低下して仮死状態に陥る。この経過はまさしく酸素欠乏時の症状にひとしい。

果して後日行なわれた検査によって、現場の酸素量がいちじるしく減少していることが判明したのである。思うに船内に満載してある鉄鉱石が酸化される過程で、この空室の酸素が大量に消費されたのではあるまいか。しかしそのような原因究明は主題から離れる。私がここで強調したいのは、本例の如く酸素欠乏の中にありながら苦痛を覚えない、否むしろ心地よささえ覚えたという事実である。

○

ここで話題をかえ、酸素欠乏の問題を別の方面から眺めてみよう。一八七五年 Tissardier は軽気球ゼニット号に搭乗して上昇し

た。気球は八七八四米まで昇ってから下降したのだが、その間に同僚二人は死亡した。彼はそのときの体験を次のように述べている。

「……少しも苦しくはない。それどころか、かえって心の歓喜を経験した……なおも上昇する。上昇できて幸福だ……最後の瞬間、めまいがしてきたあとで突然わからなくなった……」——体内では酸素が不足しているというのに、不思議なことには酸素を渴望しない。それどころか歓喜の感すら覚える。恍惚状態のあとにくる人事不省……それはまさに劇的である。

この経過を渇きや飢えの場合に比較すると、いちじるしい差異があることに気付くであろう。飢えや渇きの世界を彷徨する人間は、ただもう食べたい飲みたいの一念で本能的に行動する。ところが酸素欠乏の場合はまったく趣きを異にし、破局にのぞみながら肝心の酸素を求めようとしない。そしてそのことは、意識喪失から致命的結果へと通じるの

である。

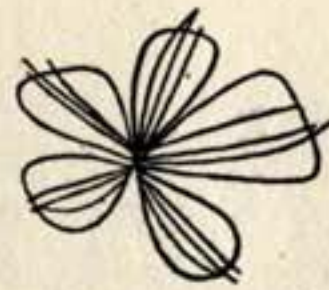
このように同じく一つの死に臨みながら片方は飢渴に苦しみあえぎ、片方では歓喜の中

生死事大

今年の元朝も全国各地の寺々では除夜の鐘を撞く人々で賑ったことであろうが、長野善光寺でも長い行列が出来、一撞き一撞きにさまざまな願いをこめて除夜の鐘が鳴りひびいた。

「除夜の鐘」は数多い仏教行事のなかでも一年の最初の朝ということもあってか生々としていて明るく楽しいものの一つであるが、同時に非常に意義深い行事であると思われる

に幸福感を味っているのである。生死現前とはいいいながら、まことに人間の生理機能は不思議なものである。



わかおみ ゆう こう
若麻績 侑孝

(長野市淵之坊住職)

る。

というのも毎朝、大衆に起床を知らせる板木を打つときの偈、

敬白大衆 生死事大 無常迅速 各宜醒覺
慎勿放逸

にいうが如く「生死事大 無常迅速」をよく知り、「醒覺と精進」をキモに命ずる一年の最

初の朝、「まあ眠っていないで起きなさい。心を醒まし、ことし一年をしつかりと生きましょう」と撞き出されるのが除夜の鐘であるからであらう。

○

また「夜を除く」ということばも大変よいことばで、そこには単に一年の区切りという意味だけでなく、「眼覚めよ、眼覚めよ、生きよ、生きよ」と相い呼びあい、相い生きあう積極的な意味があるからでもある。

一年の最初の朝だけに「除夜」といってはいっても、これは日々においてもまったく同じ線上におきかえられることであり、そこに「生死事大 無常迅速」の確認がなされなければならぬからであらう。

○

話は変わりますが、昨年十一月八日から十一日までの三日間、長野県遺族会と長野県の共

催により、終戦三十三回忌を記念しフィリッピン戦跡巡拝団が企画され、予定の人員をはるかに上廻る四百名の参加を得て実行された。このことは遺族の方の心情にはなお戦死者を想う哀惜と、今日を迎え得た感謝の情があつたればこそであるが、一方大本山善光寺大本願法主一条智光上人を大導師にお迎えして盛大な慰霊法要が厳修されることが最大の目的であつたためでもあつた。

小生もその随行の一員として十一月八日、名古屋空港を飛び立ち、エアマニラの臨時便は日のすっかり落ちたマニラ空港へ、フィリッピン陸軍軍楽隊の歓迎演奏の奏せられるなかに着いた。

翌日はコレヒドール島巡拝の日であつた。歴史に名高い要塞としてのこの島は、マニラ湾からホーバークラフトで約一時間半の位置にあり、棧橋に着くとすぐ眼の前に第二次大戦の時の砲弾の痕跡が無数に残るトーチカに出会いハッとさせられる。大変な激戦修羅場

となった島で、米軍は一度撤退をよぎなくされ、再び上陸し占領したところであった。

島のほぼ中央部にマリンタ・トンネルがある。十文字のトンネルは、南北両入口は海に至る約千メートル、東西は山中に入口をもち約六百メートルの主壕から左右に一五〇メートルほどの壕が十五あまり掘られた大変な規模の地下壕であり、戦争中はこの中に司令本部から病院まで完備していた。

しかし、このトンネルの争奪が最後の激戦地となり、米軍が再上陸をして終決に至るまでに約五百人の日本兵が生き埋めにされ、四千五百人余が戦死、海へ逃げだそうとして殺された者二百人と推定されており（ガレオン歴史シリーズ『コレヒドール』、アルフォンソ・アルイット著による）、その想像を絶する悲惨な戦場は、「生物は一つとして存在しなかった」と語られたのであった。

一行は激戦の地トップサイドの一隅、海を見下す断崖の上に誰れかが建てた塔婆があ

り、ここではじめて誦経念仏回向をしたのであった。遺族の捧げる線香の煙がシダやツル草の間をぬい、大地を離れるのを嫌うがごとく這っていくのが不思議だった。

そのあとマリンタ・トンネルの一部に入ったが惻々とせまる靈気は今なお志半ばにして憤死した多くの戦死者たちの嘆きの声となつてせまり、念仏を称えずにはなかを歩くことは出来なかった。

翌十一月十日快晴のなかを目的の地カリラヤ日本軍人墓地に向った。マニラ市内から約二時間もかかるこの地は、かつて日本軍が全滅にあった山中であったと聞く。

昭和四十八年に日本政府と日本遺族会が約三億円の費用で造られたもので、「日本庭園」と表示されているごとく、日本流の滝が落ちさまざまな花が周囲に咲く池には錦鯉がゆったりと泳ぐ静かな風景がひらける。

これよりまた階段を昇ると拝殿をとおして記念碑がのぞめる。高さ約二・五メートル、

幅約一〇メートルの壁状の碑には「比島戦歿者の碑」と刻まれた大理石がはめこまれていた。

長野から持参した五具足と遺族が家より運んだタバコ、酒、千羽鶴、味噌、手まり等がところせましと祭壇に積まれ荘厳となっている。

フィリッピン政府の特別の配慮からパトリルカーの先導により十一台のバスが着きいよいよ慰霊祭となった。三十五度近い炎熱の下であったが、このような状況のなかで戦い逝った人々のことを想えば四百人の参列者も一人としてつらい顔をする者もなく、ひたすら冥福を祈るのみであった。

一条智光上人を大導師とし五人の式衆が荘厳衣をつけ法要は厳修されたが、遺族会の方方は勿論、現地の人々もこの盛儀に大変歓び感激して頂けたことは望外の成果でもあった。

法要後、持参した角塔婆を記念碑の裏手の丘に建て回向塔婆をその周囲に各自建て、持

参した酒やタバコ等を手向けたが、一人の婦人は孫たちの写真を一心に物いわぬ塔婆に見せ長い間なにごとかを語りかけていた。

その婦人は言った。「私は結婚して三カ月で夫が召集、夫の次男、三男も相次いで出征しこの地で戦死しました。私は残された四男と再婚し、両親を守り家をまもり死にものぐるいで生きてきました。今日父ちゃんに全部しゃべって上げましたので、父ちゃんも飲んでくれたでしょう」と。

また団体中最高令者は九十一歳のおばあさんであった。孫に手を引かれ、なんとしても息子の戦死の地に線香を手向けたいと参加されたものであったが、猛暑と風土の異なる土地にあっても元気に過される姿は団員全員に深い感銘を与えずにはおかなかった。

戦争というもののもたらした運命は、残された者にも深く痛い運命を背負わせていた。

法要を終えた一条智光上人はふともらされた。「肉身親子という縁の不可思議な力が九

十歳を超えた方までをこの地に運んだのでしようネ。それにしても生命を得るということのご縁は単に親子、兄弟というだけでなく、実は今この世と一緒に生きるすべての人との縁といえるのではないでしょうか。

「人身受け難し、今すでに受く」ということはをこの時ほど強く感じさせられたことはなかった。

若くして志を得ないで憤死した幾万という人々を想うとき、受け難き人身をそのような形で失ったことの悲しみとつらさが胸をつくのであった。

○

「生死事大 無常迅速」は平均寿命がいくつになっても変えることはない。であればこそ、心の覚醒と精進が大切なのでありましょう。

今年の「除夜の鐘」を生きている歓びとして享けとらされたことに心から感謝しております。

① ② ③ ④

涅槃の日に亡くなった釈尊

無上の果位にのぼらせ給ふ釈迦だにも、二月十五日の夜の雲にかくれ給ひし有様を、見ても知れとや寺々に、ことわりがほの涅槃像、かくるたのみも後の世を、知るや知らずや参りける。なかにことさらかたくななる姥が、うなづきいふやう、「釈迦も果報な人や。やれ今日のねはんにお死にあつた」。〔角川文庫本『醒睡笑』上巻、一九六ページ〕

これは、近世初頭の粹人和尚安楽庵策伝の集めた笑話集『醒睡笑』の一話である。わかりやすく話せば、二月十五日は釈尊の亡くなられた日で、どこの寺でもそのお涅槃の様子を描いた涅槃図などを掲げて法会を営む。しかし参詣人たちは、こうしたいわれを知っているのか知らないのか、それでもあちこちから集まってくる。その中の一人の頑固婆さんがいうには、「お釈迦さまは本当にしあわせな人だよ。ちょうど今日の涅槃の日に亡くなられたのだから」と。

(H)



別れの悲しみ

生きている人間には、いつも死の影がつきまといっている。生を享けて地上に生まれたからには、死をもって天上に還らなければならぬ。古来より、「生者必滅」といって、生あるものはかならず滅するとは、まことに世の中の真理であるが、ここで「会者定離」と続けていわれるのが、実は生きるものの本当の悲しみを、憐れみを、よく映した言葉であろう。死ということの真実のありさまについて、私たち人間は実際にはほとんど知らないのがある。生きている現実には、こうして今、私たち自身が生活を営んでいるわけであるから、一応は認識して、理解しているといってもよいであろう。しかし、死そのものについては

自分自身で具体的に確かめえるものでないから、あくまでも想像の領域にあるものであつて、考えてみれば現実的にはなにひとつ確実な把握はできない。ほかの人の死に直面して、はじめて死というもののおぼろげな恐怖を感受するが、それは、今現に生きている私自身の感覚ではないのである。死んだその人が、もはやこの世にはいないという、その現実の認識によって、死というものの悲しく恐ろしい姿を把えたにすぎないのである。

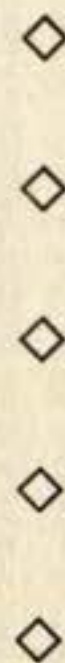
ところで、「会者定離」、会うものはきまつて離れなければならないということは、生きている世界の事柄では決してない。生きてさえいけば、かならずやまた会える日もあらうというものである。「会者定離」とは、生と死の境を分断する悲しい掟である。

必ず知らねばならぬことは、世の常なことである。会えば必ず離れねばならぬ。憂悩を懐くことはいらぬ。世の相は皆この通りである。常に勤めて解脱を求

め、智慧の光をもって、諸の癡暗を滅ぼし、疾く、別離のない家に到るがよい
 『長阿含経』卷四「遊行経」、『新訳仏教聖典』
 八大法輪閣、六六七ページ

これは、釈尊仏陀がその涅槃臨終の時に際して、弟子たちに諭した最後の誠めの一文である。大聖釈尊は、こうしたそれこそ懇切丁寧な心のこもった教えを残して、ついには、「汝等、且く静かにせよ、言うてはならぬ。時が来た。私は滅度するであろう」と述べて、静かな寂定の世界へみまかられたのである。多くの弟子たちが、深い悲しみのうちに、胸をいため、嘆きむせんだことはいうまでもない。長老のアヌルツダ（阿那律）が、「さように憂え悲しんではならぬ。仏は先に私達のために、諸行の性も相も皆このように常ないことを説きたもうたではないか」と、穏やかに弟子たちを鎮めても、慟哭の広まりは決しておさまることにはなかったであろう。それは、「諸行無常」というこの世の理法を知る前

に、まず死んだ釈尊との別れの悲しみである。その別れの悲しみこそ、遠く二千五百年のはるかかなたの時代から、今に受け継がれて、私たちの心をゆさぶる。釈尊仏陀の大涅槃に、今涙するのは決して私ひとりではあるまい。



死こそ、私たち人間が味わう本当の別離である。駅のホームや空港で人を見送る時でさえ、また学窓や仕事を離れる時でさえ、また肉親や恋人と別れる時でさえ、あるいは旅のつれづれのサヨナラにさえ、それぞれ涙ぐみ、胸熱くなる私たちであるから、人の死に会えば、もうあたりかまわず泣きわめいてしまうに決まっている。そして死に別れた人への悲しみは、歳月がどれだけ過ぎ去ろうと、私たちの心の奥深く刻み込まれていて、決して消えることがないのである。

（原 裕）

すもろ

土俵際

浅井 正

(二十六代立行司木村庄之助)

(一)

私が相撲の行司になりましたのは、大正七年で、その年の暮れに上京しまして井筒部屋というところに入門したわけです。この入門のきっかけと申しますと、丁度井筒親方の奥様が私の故郷から嫁がれていたという関係でした。大正八年の一月場所の前に、親方から「お前は行司をやるんだ」といわれたのですが、その頃の私は行司というものがないにをするのかも知らなかったのです。本

場所がはじまりましたら、夜中の二時頃に起きて両国の国技館に参ったわけです。その際には、呼び出しさんが「一番、一番でございます」と、拍子木をたたいて起こして回るわけです。そして国技館に行きますと、先輩からまず衣裳を着けることを習い、まだ土俵の上にあがったこともないのですから、千秋楽まで土俵の下で先輩のやることを見ていたわけです。

それから二月になりました、関東地方に巡業にでることになりました。そして、はじめて土俵にあげられまし

たのは千葉県でのことでした。先輩たちから土俵上の所作を色々と教わってあがったのですが、いざあがって見ますと目の先がまっ暗になり、どのように力士の名前を唱えたかも覚えていませんでした。こうして一カ月間の巡業を一応終えて、五月場所の本場所からいよいよ土俵にあがったわけです。しかし巡業と本場所の相撲とは全然違いまして、これもいくつかの失敗を重ねたわけです。まず見損ないといいますが、ミスをすることが非常に多かったのです。それでも先輩の振舞いや教えに従って、本格的な修行に入って行ったわけです。

行司の修行といいますが、もとより土俵が生命ではありませんが、そのほかに「相撲字」というものを習わなければならぬのです。地方に行きまして、雨が降って興行が休みの時は、先輩から新聞紙の上にご存知のように「勘亭流」といいますが、相撲字をひたすら習うわけでした。もちろん土俵上の立居振舞いの基本を覚えることが、一番肝心なことではあったのですが……。

ややして、月日が過ぎ去りまして、それから土俵上の声の修行をしたわけです。地方巡業のかたわら、山や川にでて大きな声を張り上げたものでした。そうして十

七、八歳の頃になりますと自分自身で先輩のすることを見習いながら、長い大変な修行を続けたわけです。ともかく二十五歳位までの期間は、非常に厳しい修行の連続でした。それから幕下になりました時には、早く十両にならないかなと本当に思ったものです。十両になると一人前、まず付き人がついて自分の身の回りのことをしてくれるわけです。これはもう憧がれでした。お相撲さんが「十両にあがったことが一番うれしい」とよくいいますが、行司もまた十両にあがることが一番の目標であったのです。そして十両にあがったとしても、そこで安閑としてはいられないのです。と申しますと、自分は今までは修行の身でしたが、今度は下のものを指導して行かなくてはならないのです。その意味では、より以上に苦しかったともいえます。

かくして幕内にあがりますと、いよいよ相撲協会の全体の中での行司としての立場やその職分を身につけて行くわけです。

(二)

幕内においては、勝負それ自体が非常にむずかしくな

ります。それは、行司にとっても慎重でなければならぬ「土俵際」の勝負が、ことさらに多くなるからです。土俵際で一番むずかしいのは、いわゆる「うっちゃり」です。うっちゃりと申しますと、「体の割れ」、つまり「死に体」「生き体」をはっきりと見定めることのむずかしさです。普通行司はどこを見ていいのかといいますと、力士が立ちあがりしたら「まわし」から下の足のところに目を据えているわけです。そして土俵際の勝負が決まれば、とっさに軍配をあげなければならないわけです。やはり、勘を養うということが大切です。

こうした行司生活で、多くの名勝負を見る機会に恵まれたことはとても幸せなことでした。もちろん、まだ下の時分に上位の好勝負など見ることもできませんでしたが、なんといっても、双葉山Ⅱ安芸の海戦の大勝負が一番印象に残っています。ということは、双方が立ちあがって双葉山関が安芸の海関に土俵際まで寄られまして、これを双葉山関が左に見事にうっちゃったのですが、その右足に安芸の海関が絡んでくるのをよくそりながらうっちゃったわけでした。この相撲こそ、私の脳裡にまざまざと写っている一番ですが、それから後に双葉山関は

安芸の海関にあの六十九連勝をストップさせられたのでした。その次の名勝負は栃錦、若の花ともに全勝同士、そして大相撲になり水入りでようやく栃錦関が勝った一番でした。それから後に、大鵬という大横綱がでまして、もちろん一時期は柏戸と並んで「柏鵬時代」という黄金期を作ったのですが、その大鵬関が昭和四十五年の三月場所、大阪の春場所でしたが、私が丁度「式守伊之助」を名乗っていた時でしたが、先頃引退して雷親方になられた羽黒岩関、この人が戸田といった時分です。二日目に大鵬関とあいまして、やはり戸田関が一べんに東土俵に追いつめました。ところが大鵬関ははたきながら土俵をつたわって正面の方に回り込んだのですが、その前に戸田関の足が土俵の外に出たのを私は見まして、大鵬関に軍配をあげましたところ、物言いがつきまして、その協議の結果、五人の勝負審判員のすべてが「大鵬関の負け」を宣したのです。私は自信をもって軍配をあげたのですが、「戸田関の勝ち」ということとなり、私のミスとなったわけです。私は本当に自信があったのです。「くやしい」という思いで、翌朝の新聞を見ますと、全紙の写真が戸田関の勇み足を捉えて、「大鵬関の勝ち」

を裏づけていたのです。その後、五月場所からむずかしい相撲に対する写真判定ということから、NHKのビデオを試験的に採用することにもなったのです。その時の私は確かに一つのミスを犯したということにはなりましたが、土俵上の改革ということでは、やはりよかったと思っています。そして、この時の大鵬関は、双葉山関の六十九連勝に挑戦して四十五連勝と幕進していたのです。これが負けていなかったら、おそらくは双葉山関の連勝記録を破っていたのではないかとも思えるのです。……。いずれにせよ。この一番の思い出は尽きることはありません。

(三)

それから「木村庄之助」の名跡を継承することになったのですが、行司生活はまことに神経を使う厳しい職業でもあったと痛感するのです。ことに十両から幕内にあがりまして、幕内の勝負の微妙さには本当にむずかしいと驚かされました。幕内にあがった当初、鳴門海Ⅱ若葉山という一番を見ました。私は土俵の隅に追いつめられました。双方が倒れてきたので、土俵下に飛び降りる結

果になったのです。勝負は見ていたのですが、飛び降りる一瞬、私は後ろ向きになってしまったので、審判員に「どちらが勝ちましたか」と尋ねましたところ、「勝った方を自分であげろ」といわれたので、私は一応私の判断であげたのですが、それはその審判員によって見事くつがえされてしまいました。このようないささか非情なやり取りもあったわけです。そして幕内から三役格にあがりますと、まずその異常な圧迫感に襲われるのです。

ともかく行司は小さい時からやりましても、小さい時の修行、これは所作等を身につけるといふ具体的修行ですが、そうした時期を乗り越えてからが、実は本当の修行でもあるわけです。土俵にあがったら、まず邪念を払い、いわゆる「無我」の境地に徹し切らなければならぬのです。色々な妄想をめぐらしていますと、応々にして勝負を間違えることが多いわけです。行司というのは、若い下のものでも、年長の上のものでも、毎日毎日が修行の一語に尽きると思います。勝負を正しい判断で見るために、全神経を集中しなければならぬのです。

こうして私は、第二十六代木村庄之助になりました。

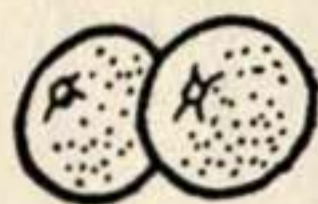
より以上に自分の苦しい立場を痛感したわけです。やはり行司としての最高の職分、木村庄之助としてのありようは、おのずから相撲の一番、一番への神経を過敏にさせるわけでした。もし見損えば、進退伺いを提出して責任を取ることはもちろんですが、いずれにしても後輩の範を垂れなければならない存在として、その緊張の度合もことさらに大きくなっていったことは当然であつたわけです。ともかくこうして、つつがなく行司生活を勤めさせていただいたわけです。昭和五十一年の十一月の九州福岡場所を最後に引退することになったのです。この時は、初日から非常な緊張感に襲われまして、なんの誤まりや問題もなく、無事な十五日間を終えることだけをひたすら願ったわけでした。こうして迎えた千秋楽の十五日目、全勝同士の横綱、輪島Ⅱ北の湖戦の最後の一番こそ、実は私の行司生活のもっとも印象的な大一番であつたかもしれません。それは、両横綱が全勝をもって優勝をかけて争ってくれるこの勝負に、この一番をもって引退して行く私へのはなむけの思いが込められていると、心から感謝の思いで受けとめたからでした。ともかく、この大一番は、北の湖関が勝ちまして全勝優勝をなし遂

げたのですが、この時、北の湖関へ勝ち名乗りをあげた時の私は、もう胸が一杯で感きわまっていました。土俵から降りました時には、それこそガツクリといたしました。

振り返ってみますと、八歳の時からの五十八年間の行司生活は、本当に長いようでもあり、また短いようでもありました。そうして昭和五十二年一月二日につつがなく退職したのでした。

〔文責編集部〕

今回掲載させていただいた「土俵際」は、第二十六代立行司「木村庄之助」であられた浅井正さんのお話です。長い間の行司生活を立派に勤められて、相撲界の内側からのぞかれた力士たちの稽古と修行の男の世界、あるいは勝負を判定する行司としてのみずから立場、信条、あるいはまた大相撲を支える陰の人たちのさまざまな努力などを、実際の体験に即して見聞された事実は私たちに大いなる感銘を呼び起こします。このお話は、一月十二日（木）から十四日（土）にかけて放送されたものです。



親鸞から法然へ

—縁起・相依性にひかれて—

おお
はし
けん
いち
大橋賢一

私がいかなる仕方であらう上人に出会い、その教えをいかに受け取るに至っているかという、いわば私の法然理解の遍歴を述べてみたいと思う。

私の仏教体験のはじめは、親鸞との出会いだった。

親鸞の主著『教行信証』に頻りに出てくる「海」の文字に惹かれて、直江津、居多の浜辺を訪れ、国分寺域に指定されている草庵跡に立って、在りし日をしのんだこともあった。

新井市であったか、親鸞の妻・恵信尼の住まいの跡を訪れ、中世庶民の薄暗い生活の中で、温かく息づいていた信仰の光明を認めようとしたのも、同じ頃であった。

私のそうした親鸞体験の底を支えていたのは、金子大栄師の教学であったといっても過言ではない。とりわ

け、師の『仏教概論』の重厚・的確な仏教理解は、その念仏一つへの統一の意志と情熱と共に、今でも私の心を離さないのである。

『仏教概論』中、仏教の本質を「無我」に置かれている箇所、それと関連して、釈尊の自内証をたずねて、その無我観の「いまだかつて知らざる幽闇なる思想に、身ぶるいするのである」といった理解と表現、また、唯識の項で嗟嘆の言を発せられて「造業者としての意識は、阿頼耶が如何なる果を感受するかを顧慮するところなく活動している。しかるに感果者としての阿頼耶は之に対して何等の愛憎を感じるところなくおもむろに現実に随順して行く。——まことに『業は心を知らず、心は業を知らざる』心識の『駛水の流れの如く、流れ流れて絶え已

むことなき』相こそ神秘の極みではないか」と述べられているごとき、今でも共に「身ぶるい」を感じ、厳肅な精神現象に対して共に「神秘の極み」を思うのである。

しかるに、どうして親鸞の教えから離れたのか、どうして真宗から離れてきたのか、ということになるが、事実、これだ、というはつきりした理由を挙げることはむずかしい。

強いて理由らしきものを思い起こせば、まず基本の問題として、他力廻向の説に対し、実感をもって領き得なかったことがあげられようか。

三心一心の字意釈にみられる発見の歎び、また、『教行信証』を通じて感じられる格調高い表現等々にもかかわらず、「不可思議、不可称、不可説、一乗大智願海、廻向利益他の真実心なり」という受けとめ方、「あらゆる衆生、その名号をききて信心歡喜せんこと乃至一念せん、至心に廻向したまへり……」ということが遂にわからなかったのである。

一応の道理として、仏力に催される面のあることは理解できても、至心・信樂・欲生の三心全てが如来廻向のものだとは受けとれなかったのである。

次に、真宗から離れた理由として、他力廻向説を「真」なるものとし、他をすべて自力性を残した「偽」なるものとして批判することに疑問を感じたことを挙げたいと思う。

例えば、そういう真偽勘決の極まるところ「源信、法然をはじめ、浄土の教えの一切の祖師すら、異端邪説の仲間へ入る大胆きわまる説」（梅原猛氏文「親鸞と教行信証」ということにもなってくるのである。

だから、卑俗きわまる表現をすれば、親鸞の絶対他力説に心服すると同時に、いや、心服の強さよりも強い程度で、「他」（の自力性）を批判しようとする傾向が出てくるということなのだ。（もちろん、これは私の経験から言っていることなのだ。）

そういうふうにして、私の心は徐々に親鸞から離れて、その師法然へと移っていったのであるが、その辺の消息を述べるとき、もう一つの文章及び考え方が私に作用したことを付け加えておかねばならない。

それは、同じく金子大栄師の文章で、「しかれば、更に仏教徒と名告らなくとも、その所説が仏教的であるものは、また諸仏として尊重してよいものではないである

うか」。「華嚴經に依れば、この世界では仏を釈迦というが、善護国では平等といい、難養国では樂恵といい、等々と説かれている。しからば、仏陀を印度では釈迦といい、希臘では——といい、ローマでは——といい、ドイツでは、イギリスではアフリカでは等々ということもできるであろう。その聖賢によりて、われらは宗教的教養をうけ、敬虔感情を豊かにし、人間にかけられている無限大悲の願というものを感じしめられてきた。とすれば、それらの賢者たちも、諸仏と仰いでよいものであるに違ひはない」(金子大栄師『晩学聞思録』)などという、寛大の姿勢をあらわすものであった。

かくして、私の法然上人への邂逅は必然のものとなったようである。

なぜなら、真宗への第一の疑問点、他力廻向説に対しでは「彼の仏願に乗ずるが故に他力と名付く」(『漢語灯録』第十)として、他力支持説を出して、本願力として慈悲が衆生に及ぶという、いわば「救いの原理」と共に、それを受持する現実の凡夫の、修行を要する点をも考慮に入れられて、(いわば真・俗二諦がさながらに含み入れられた)周到で剩すところのない浄土宗の説教が浮かび上が

ってきたのである。

換言すれば、私の内部において、他力廻向の信心のみであるとする親鸞の絶対的一元論を離れ、本願力支持の念仏を行じるといふ、信と行相對の多元論に転じたということである。

智目に行足が備わって、私の浄土教領解は、はじめて落ち着いたのであった。

第二の、他宗の見方についての私の疑問は、だからその浄土宗・相對的多元論で自ら解決できたのである。

既に「宗々の一切經」として、各宗それぞれの觀點の相違によって宗派が分かれたのであるとの、実に当然至極な道理を示された法然上人のお言葉がある(『勅修御伝』)。そしてその宗々相對の視点は「宗に随って不同なり」(第一章)とか、「おのおのその宗に随って、その義不同なり」(第十二章)などという表現で、上人の主著『選択本願念仏集』には隨所に示されているのであった。

さてこそ、金子大栄師の到達されたような寛大な諸仏觀にしても、浄土宗・相對的多元論においては、当然至極の道理であつたと言えるのであらう。

私の法然回帰は、従って次の一言で尽くすことができる。

△絶対から相対へ▽

即ち、親鸞の『教行信証』行巻、念仏諸善比較対論して、難易対、頓漸対、横堅対等々を述べたあとで、「しかるに本願一乗海を按ずるに、円融満足、極速無礙、絶対不二の教なり」と述べ、機について対論したあとでも、「しかるに一乗海の機を按ずるに、金剛信心、絶対不二の機なり」と繰り返している。それは勿論、本願念仏による救いの広大なことを讃嘆しての表現なのであるが、やはり「絶対」という表現には、（真宗「二」につに統一しようという）絶対主義の入り込んでいることは否めないと思われる。

しかしながら、「縁起というのは、相対性の原理なのである。譬えをもっていえば、二つの芦束は相依りて立つということなのである。……そこには、絶対者の片影すらも見出されない」（増谷文雄氏『仏教概論』）とされる釈尊の原始仏教より見れば、絶対主義を排して相対主義

を説いていること明らかなのである。

かくして、その原始仏教の相対主義が、遙か後代、法然上人によって受け継がれ、蘇えったのであった。

そして私は、次のような先学の鋭い指摘を記しとどめておきたいのである。

まず松崎可定氏の「上人の（相対現象論という）基本的立場は、原始仏教の縁起観の最も確実な把握から来ている」（『仏教論叢』第二十一号）という文章と、石上善応氏の「法然は相対的な立ち場でものを見ていて、その点で親鸞より法然を高く評価すべき」（『地獄と人間』より取意）であるという見解、さらには山本空外氏のいわれる「仏教の各々性と法然教学」（『浄土宗学研究』・第三号取意）というような観点である。

またさらに拙文「法然ほど仏教の相対性原理を体した人はいない」（昭和四十六年、奈良新聞）と見てきて、正に今、法然と相対主義を唱える新たな時であると確信するのである。

上述のように、いささか私の内的思索の思うに任せて、法然の浄土教思想の一面を理解したのであり、これは私のこれからの生活の支えとなる信念でもある。



法然上人の問答から教えを求む(四)

吉村孝
よしむら たかし

『問、一の疑に、三心の事を尋申ける。

答、上人の給はく、三心を具する者は、必ず彼国に生ずと説給へり。此三心を具して念仏すべき也。一に至誠心と云は阿弥陀仏を憑奉る心なり。二に信樂と云は常に名号を唱て往生をうたかはぬ也。三に回向発願心と云は常に名号を唱て往生をうたかはぬ也。三に回向発願心と云は、往生して衆生を利益せんと思ふ心也。

譬をもていはは、人有て一の太刀をもちたらんに、此太刀は御身の造り給へるか人とはいは、我は手つつにて何事もせぬ者にて候。人のたまひて候也と答へは、人も

まいらせたれ、わとのの為には財かと又とへは、さ候と答ふ。太刀をまうくるは至誠心也。此太刀は大事の物なり。あたにせしと思は深心也。さてわれにももち物もきらんは、回向発願心也。しかのことく本願にあふは至誠心也。名号を持て常に唱て、余行の人にいひやふられさるは深心也。往生せんと思ふは回向心也。

又女人に三心を心得ん時は、御前の袋を一つまうけてましまさんに、あけて見れば萬の財を入たり。袋まうくるは至誠心なり。此袋には大事の物を入たり。あたにせしとおもふは深心也。中にある物を取りいたして要事に

つかふは回向心也。しかのことく、本願にあふは袋を儲たるかことし。此名号の中には、阿弥陀仏の初発心より乃至仏にならせ給て、六度萬行一切の功德を造あつめて、名号に納めて衆生に与へ給へる名号なれば、おろそかにせしとて、別解別行の人にもいひやふられずして南無阿弥陀仏と唱るは、不思議の本願なるによりて、かかる罪人どもの浄土へ迎へられ、生死を離れすらんと思ひかためて、若し手はふさからは数をとらすとも、命終らんまで、口に常に唱るを深心と云也。

又のやうはたとへは人の敵を持たらんに、敵はつは物なるを、我はよはくしてうつに及はさらんに、我敵にまさりたるつは物、我を愚まはうちてとらせんといはんに、悦て愚て宮仕をせは約束をたかへず、敵をうつ也。討ものを愚むは至誠心也。宮仕へするは深心也。敵を討は回向発願心也。しかのことく我等衆生は、無始より已来悪業煩惱の敵にせめられて、四道四生を輪回して生死を離へきやうなきに、阿弥陀仏の、我に歸し我を愚まは、煩惱の敵をうちてえさせんと御誓あれば、仏を愚み奉は至誠心也。名号を唱ておこたりなく、仏に宮仕へ奉るは深心也。最後臨終に來迎にあつかりて生死を離るる

は回向心也。三心具足するはかりやすき事はなしと、人には教えよとぞ仰られける』

私解

問、三心に疑問がありますのでお尋ねいたします。

答、法然上人は次のように申しました。至誠心、深心、回向発願心の三つを具えている者は、必ず極樂浄土に往ける、と。念仏修行者は皆この三心を具えて念仏すべきである。先づ至誠心というのは阿弥陀仏をたより奉る心のことである。次に信樂しんぎょうというのは必ず往生できると疑わない心で南無阿弥陀仏を称えることである。三の回向発願心というのは、総ての力を念仏に振り向けて自分が往生することができたら、次にはまだ往生できない人々に力を貸して共に往生しようと努力する心のことである。

これらの三心を譬えをもつて説明すると、ある人が一つの刀を持っていて、この刀はあなたが造ったのかと人に問われれば、私は不器用なもので何も出来ない者です。人もそういつて下さいますと答えれば、又人も来て下さって、あなたの為にはそれは宝物かといいましたの

で、そうですと答えました。刀を手に入れることは至誠心である。この刀は大事な物であるから粗末にしてはならないと思うことは深心である。さて、自分の手でその刀で物を切ることは回向発願心である。

このように尊い刀（本願）に合うことが至誠心である。南無阿弥陀仏と常に口に称えて、他の宗派の修行者の言うことに心を動かして念仏を怠けたり他宗派の人の言葉によって念仏修行が妨げ破られてしまうような事がないのを深心と言うのである。

この至誠心と深心とを別の例で考えて見ますと、バスや電車のつり皮や棒にしっかり掴まっていればいくら揺れても安心していられると思うことが至誠心で、それを理解した上で自分の手でしっかり掴まることが深心です。

又学校などで学問を身につけることが至誠心でその学問を社会で活用することが深心です。つまり皮も学問もただ知っているだけでは何の価値も生じません。つり皮をしっかりと掴み、学問を外に活用して始めて価値が生ずるものであります。その価値が生ずることを人に勧めてあげることが回向発願心であります。それ故に至誠心と

深心と回向発願心の三つは常に一体であるべきものであります。

法然上人が称名念仏に専念せよと説いていることも、本はこの例のように理屈をよく知り尽して納得してから行ずる念仏ではなくて、仏の本願が南無阿弥陀仏の称名念仏であることを深く信じ固く受持して行ない、広く人に勧めよということであります。

善導和尚も、衆生を念仏に誘うことが仏の御心に叶う事だと言っておりますが、その理由は、もしも現在、念仏修行者が自分だけが往生すればそれでよいのだと考えて修行していたとしますと、それに続く念仏者が絶えてしまします。それ故に釈尊自身も教えを広める事に就きましては、菩薩行の始めに布施行を定めたり、仏道修行の教えの中には必ず解説（人によく解るように説明してあげること）を含めて力を尽くしております。

回向発願心を難しく考えますと、菩薩になれた人だけが人を誘って念仏修行の道に入れる資格があるように思われますが、人を誘い入れることは必ずしも菩薩行を修めた人には限りません。何故なら法然上人は至誠心と深心とを具えれば必ず悟りの境界極楽浄土へ往けると深く

信じた人は、その時は既に浄土への道を歩んでいる人であるから、菩薩に限らず念仏者は誰でも、正しい信仰を持たずに不安な生活をしている人や、疑惑や不信を懷いて信仰を敬遠している人などを念仏の道に誘い入れてあげることが、仏の本願に叶った行き方であると教えているのであります。

又、譬えの「女人に三心を心得ん時は……」の袋は、阿弥陀仏の慈悲や功德がその中に一ぱい入っていることを知ることが至誠心で、この袋を大切に扱うことが深心で、人を誘い入れる時や、自分の念仏修行が乱れてきたような時にこの袋の中の教えを取り出して使うことが回向心であります。

これに続いて法然上人は、物への執著から離れたくても多忙で念仏修行のできにくい人は、念仏の数を定めなくとも口で常に仏名を称えればよいと教えております。

最後の譬えは、執著から離れたいと思っても、どうしても離れることのできない者は、阿弥陀仏に煩惱の敵を討ち取ってもらうようお願いすれば、阿弥陀仏は必ず執著の悪魔を対治して下さるということで、阿弥陀仏にお願いすれば対治してもらえると知る事が至誠心で、名

号を称えることは阿弥陀仏の力によって自分で対治すること、完全に対治することができたと知ることが回向心であるということです。そして最後に至誠心、深心、回向発願心を具えることほど易しいことはないのだから、これを他の人にも教えてあげなさいと言っております。

この問答で法然上人が別解別行の人にもいいやぶられずして南無阿弥陀仏と唱えることが仏の本願であると教えられてありますが、これは仏教の奥義でありますから最も尊いものであります。私達念仏信仰者はこの尊厳な教義を失うことなくしっかり懷いて実行することが、法然上人の説く、いい破られない修行になるものと堅く信じております。

『浄土』誌購読希望者をご紹介下さい。

本誌も誌面の充実のために営為努力しているわけですが、それでも遺漏多く、読者の皆様には大変迷惑をおかけしています。しかし、それだけに弊会の一層の発展のために暖かいご配慮をお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

『勝鬘經』は漢訳に二本、チベット訳に二本あるが、その梵本は発見されていない。

在家の女性である勝鬘夫人を主人公とするこの經は、維摩居士を主人公とする『維摩經』同様、大乘仏教の在家主義を表わしたものだといえる。

『勝鬘經』は、中国でも多くの注釈がなされたが、日本においても聖徳太子による注釈『勝鬘經義疏』一卷があり、古くから

はそれに満足して、夫人の前から姿を消すという筋書きである。

勝鬘夫人によって説かれた内容は、決して容易なものではない。この經の中心課題は、大乘仏教の勝れていること、全ての人に悟りの可能性のあること(如来藏)を説くことにある。

まず始めに、真実の教えを受け入れ、身につけることの意義と功德(摂受正法)が説

(お) (經) (の) (べ) (一) (じ)

勝しょう

鬘まん

經きょう

知られているお經の一つである。

この經は、勝鬘夫人が仏を讀えたのに答えて、仏が勝鬘夫人の前に現われ、夫人に悟りの予言を授けることによって始まる。そして、仏のこの予言に感激した夫人が、仏の教えに従い、仏の教えを正しく理解し仏の教えを人々に説くであろうとの誓願を立てる。このことに基づいて、夫人が自分の仏教の理解の程を仏の前で述べると、仏

かれる。

つぎに、真実の教えとは大乘の教えであり、大乘だけが仏に至る唯一の道であること、すなわち、仏の教えを聞き、道にはげむ仏弟子たち(声聞)の道、他の教えを聞かず、独自の方法で覚り、弟子を持たない者たち(独覺)の道は方便にすぎないこと(究竟一乘)を説く。

さらに、四聖諦の中、苦の滅(苦滅諦)こ

そが唯一絶対の真理であり、苦の滅とは、存在するものの消滅を意味するものではなく、苦と苦の原因たる煩惱が本来非存在であることを意味すると述べる。したがって煩惱におおわれている凡夫も、煩惱を断じている如来も、その本質においては異ならないとする。

最後に、真実の教えたる大乘の道を究め苦の滅なる真理を悟ることは、全ての人々に備わった働きであり、誰もが悟りに至る可能性を持っていること(如来藏)を人は信すべきであること、そして、その信心によって、全ての人は、本性としての清浄な心が煩惱によって汚されているにすぎないことを確信し、その確信こそが、大乘の道において悟りへの志を立てる原動力となることを説く。

『勝鬘經』は、如来藏思想を説く代表的お經の一つであるが、また、『法華經』の一乗思想の影響も受けているお經である。『如来藏經』『不増不減經』の如来藏思想を受け、西紀三―四世紀頃にこの經は成立したと考えられている。

(T)

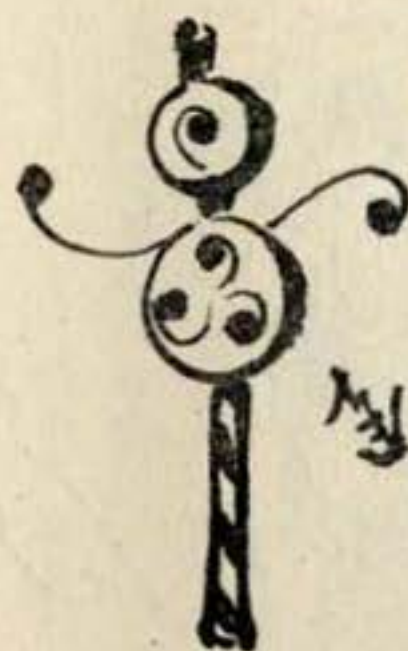
念佛ひじり三國志

(四六)

——法然とぬぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



一

頼朝夫婦にとって大媛は、いじらしくも哀れな娘であった。政略上から木曾義仲の長男と結婚させた。結婚は名目だけで、その少年義高を、鎌倉へ人質として抑留しておくのがねらいだった。

だから木曾義仲を滅したあと、少年義高はすぐに斬られることになった。ところが大媛が激しく駄々をこねる。

本気に惚れこんだ女の情念、としたいところだが、このとき大媛は七歳、相手の義高は十二歳だった。いや、そんな子供ゆえいっそう残酷な処置であり、大媛のこねる駄々には神のきびしい叫び声がこもる。

しかし心を鬼にした頼朝夫婦は、義高を武蔵の入間川の河原で斬り殺させてしまう。大媛はショックで食も通らず、以後は鬱々と笑顔を忘れた少女に変身した。

頼朝夫婦は、この娘を見るたびに胸が痛んだ。

思えば頼朝が伊豆で挙兵、石橋山の合戦でやぶれ、海

＜阿弥陀仏を念ずる政子＞



前号のあらすじ

東大寺大仏復興に際して、勸進上人俊乗房重源の果たした役割は大きい。しかし、重源もまた法然上人や熊谷入道と同様に無位無冠のひじりである。將軍源頼朝を迎えて行なわれる東大寺の供養会での席はなかった。重源の俗っぽさはそういった晴がましい舞台にあがることを好むところに単純に表われるが、明遍は他愛のない重源の俗情をむしろほほえましく見ている。

供養会の三日前に、重源のために役配を求めて、東大寺の別当職にある弟の勝憲を訪ねる明遍であった。勝憲の住房は山科にあり、安祥寺の塔中、覚潤院である。寺というよりも貴人の別邸といった構えである。そこで明遍は意外な人物と出会う。明遍がかつて見合いをした女性で、丹後局とも浄土寺二位とも呼ばれ、後白河法皇に仕えていた高階榮子である。

路三浦へ逃げのびたところ、北条政子は伊豆走湯山に身をひそめた。その衆徒に守られて頼朝の再起を願った。そのころ身邊にいたのは乳呑み児の大媛だけだった。

政子はこの女兒を抱え、ゆくすえ真っ暗な毎日を、阿弥陀像を刻ませて祈り続けていた。身が弱かった大媛。この娘が無事に育てば、必ず自分ら夫婦の前途も開けるであろう、と政子は賭けたのである。

まさしくそのギャンブルは「正目」となった。

夫婦の武運は上昇カーブを描き、ついに頼朝は將軍にまで昇りつめた。残るは鬱病に閉ざされた大媛の顔に笑いを取り戻すことだけである。

その前年(建久五年)頼朝の妹婿だった一条能保の息子高能が鎌倉へやってきた。十八歳の美貌な青年だった。大媛との縁談が進められたが、本人の意向打診に及んだとき、「再婚なんかするくらいなら淵に身を投げます」と、きっぱり拒絶された。

これほどかたくなだった大媛の心が、後鳥羽天皇との話を持ちこんだら、かすかに動いたのである。一天万乗の君ならば、色恋の沙汰を抜きにしてお仕えするのが臣下の義務、大媛なりに大義名分を立てる気になったのであろう。朝頼夫婦が狂喜したのは当然である。

縁談を煮つめるべく、東大寺供養会も兼ねて親子三人は上洛してきた。おびただしい坂東武士も同行し、まさしく「戦後」を華やかに彩る一大ページェントがくりひろげられたのである。

この建久六年、大媛は十七歳、後鳥羽天皇は十五歳であつた。

ところで後鳥羽帝と大媛を、朝廷と武家を直接結びつ

ける縁談の立案者は誰であつたのか。

丹後局と彼女と気脈を通じながら暗踏してきた久我通親。

通親については、前にも触れた。この国の史上でも第一級のオポチュニストで、婚姻の手段で宮廷政界を遊泳してきた男だ。彼は丹後局が後白河法皇との間に生んだ宣陽門院の院司を勤めていた。そのころは平氏の全盛時代で、彼は最初の妻を捨てて、平清盛の姪と再婚、平家へ深く取り入った。しかし平氏が没落するやその妻も捨てた。こんどは後鳥羽帝の乳母だった高倉範子(刑部卿三位)と三婚する。

高倉範子は平家の出身能円(のの)の妻だった。能円は都落ちに従って西走するが、範子は彼との間にもうけた娘在子ともども京都に踏みとどまる。夫と生き別れた直後に通親の妻となった。

範子の娘在子はやがて後鳥羽帝の妃になって承明門院と呼ばれた。男児を生んで、土御門帝となる。土御門通親とも呼ばれたのは、この血縁はないが外舅から由来する。

だが、こうしたオポチュニストぶりを現代の感覚で単

純に非難してばかりもいられない。それが宮廷政治の体質であり、そこで生き抜くためには、遊泳術は不可欠であった。天子や藤原宗家の公卿といえどもぼやりしていると没落を余儀された。非難するとすれば、こうした生きざまを強要し許容する政治構造そのものであろう。

通親は遊泳の渦中にあっても足もとを踏み固めるのを怠らなかった。一族で親季という不遇な男がいた。彼の息子が抜群の秀才であることを知り、通親は葉室流の出身で法然の高弟だった法蓮房信空の筋から法然門下に入室させている。後の西山上人証空である。自らの猶子（養子）としたのである。

証空のほかにも通親の子供には出家した者が多い。興福寺別当の親縁、日吉別当の雲快、東寺長者の実親、そして証空の遙かな末弟だが道元禅師は通親の実子であった。

さて、大媛入内を策した丹後局や久我通親のねらいは何であったか。政治の統一、公武合体であったか。

実証はないにしても以後の足跡をたどってゆくと、ねらいは一点に絞られる。九条兼実の追い落しである。

後白河法皇が健在のころ、法皇は東の源氏、西の平氏

この両武家勢力を操作して力を均衡させた基盤に立って宮廷の權威を保とうとした。だが平家は脆くも潰滅、あまつさえ自分らが擁した安德帝を固持してゆずらず、天皇の象器たる三種の神器すら返還しようとしなかった。平家が没落し、後白河法皇はひところ頼朝の弟義経に望みをつないだが、此方は政治力ゼロで問題とならず、奥州で朽ち果てた。後白河構想がもたついている間に、九条兼実が積極的に鎌倉へ接近していった。頼朝も京都の拠点で兼実に求めた。

後白河法皇の遺産をめぐる、長溝堂荘園を入手したはずの丹後局たちであったが、兼実のきびしい処置で、すべてを凍結されてしまった。

ところが兼実のきびしい「たてまえ論」は頼朝自身の西国所領までも凍結し、国庫へ収容する結果を招いた。平氏の旧所領は戦争に勝利した源家の所有に帰すること、後白河法皇が頼朝に約束していたのである。

この国における土地所有はいつの世でも重大な争点となる。一所懸命、という言葉が存在するように、ことに農民から育った武士の感覚は土地にことさら敏感だった。頼朝は九条兼実の真意に疑惑をいだきはじめた。こ

の際間へ丹後局や通親は巧みに潜入してきたのである。大媛入内を好餌として頼朝の前へ投げ出した。

こんどの上洛、以前建久元年の折は九条邸へ入りびたりだった頼朝だが、ほんの形式的に立ち寄っただけで、土産物も「馬二匹」だけという冷めたさであった。大媛入内の話が機、熟しつつあるとき、九条兼実の娘宣秋門院は後鳥羽帝の胤を宿しその出産が待望されているのだ。頼朝としては政治、骨肉愛の両面にわたり兼実はうとましい存在に変貌してしまったわけである。

二

浄土寺二位、丹後局栄子は山科覚潤院における明遍との約束を、適確に果たした。その第一は、將軍頼朝が臨んだ東大寺供養会における俊乗房重源の処遇だった。

建久六年三月十二日、供養会では重源の出番がなかったが、翌十三日大仏殿で重要な役がふりあてられた。大仏修復のため宋から来朝した仏師陳和卿に親しく会いたい、と頼朝は言い出し、その中使に俊乗房重源を招いたのである。

中使とは通辭の役で、宋人と頼朝との對話を重源が取

次いだ。頼朝は陳和卿の高度な技術と労を深謝し、記念に甲冑を贈った。これは、奥州に源九郎義経を討った折、身を固めた甲冑だとも言い添えた。

すべての行事が終り、堂外から傍見した明遍が立ち去ろうとすると、人ごみをかき分けるようにして重源が泳ぎ出てきた。

「將軍家はまたこのわしにふくむところがあるわい。蓮華谷へ逃げねばならぬ」

うかぬ顔でささやくのである。

「何をふくむと言うのか」

猜疑心の強さに、明遍も一寸あきれた。

「あの甲冑を奥州征伐に著用したなどと、嘘じゃ」

「嘘とは……」

「わしの顔を見て俄かに思いつかれたのじゃ」

重源が、源九郎義経をかばった事実を思い出し、何でもない甲冑に奥州征伐の折になどと当てこすった、と言うのである。

まさか、とは思うが、いったん信じこんだらすぐさま行動に移してしまう重源だった。

「誰にも、これ……」

と重源は唇に指を立てると、まるですぐ背後に追手が迫ってでもいるかのように群衆のなかへまぎれこんでいった。

「吾妻鏡」はこの間の事情を簡潔に書いている。

同年五月二十四日の頃で、

前掃部頭親能、將軍家ノ御使トシテ高野山ニ向フ。コレ東大寺ノ重源上人、去ンヌル十三日逐電ス。カノ山ニアルノ由、近日風聞スルノ間、帰洛スベキ旨、誘（コシラ）ヘ仰セラルルニヨツテナリ

続く二十九日、

重源上人出デ来タル。將軍ノ芳命ヲ重ンズルガ故ナリ。將軍関東御下向ノ事、日来カノ行方ヲ尋ネラルルニヨツテ延引ス

鎌倉へ帰るのを延引してまで重源上人の行方を探索した頼朝の意図は何であつたろうか。

とにかくこの大仏勧進上人の変幻自在な行動は歴史の

表皮に、それほど深いものとも思えないが、疑問の点滴を残して往く。

頼朝の滞京は三カ月にも及んだ。

「吾妻鏡」はこの期間に興味深い搜話を紹介する。直接頼朝とは関係のないことだが、その臣畠山二郎重忠が四月五日、梶尾に明恵上人を訪問したのである。

重忠は明恵上人と「浄土宗ノ法門ヲ談ジ、出離ノ要道ヲ承リテ退出ス、云々」だったと紹介している。

明恵上人は、後になって法然門流の「選択本願念仏集」を披読し、「摧邪輪」という反駁書をものした人である。そんな立場からこの搜話を解釈すれば、畠山重忠と浄土宗の法門を議論し、これを否定し明恵流の「出離の要道」を教えられたということになる。

だが「摧邪輪」前文のニユアンスから推量すると、「選択集」を披読するまでの明恵は法然に全幅の信頼を寄せている。明恵なりに浄土教義を理解したのか、あるいは大原談義で顕真僧正がこれまた彼流にまとめた「浄土宗」を法然の思想と解したか、どちらであろう。そこへ強烈な専修念仏義を見せつけられ、明恵は動揺と怒り、菩薩道の護持のために「摧邪輪」を書いたとみるべきだろう。

そうなる、この建久六年の時点では「選沢集」を披見したわけでないから、畠山重忠は明恵なりの浄土宗を語られ、出離の要道を教えられた、ということになる。

「選沢集」が編述された建久九年が、ひとり明恵上人だけではなく、当時の法然・曇圓の人々に大きな衝撃を与えた事実を裏付ける一つの史料ともなる「吾妻鏡」の記述と言える。

さて丹後局が明遍に約束した第二は「船」であった。將軍頼朝は東大寺の供養会をつつがなく厳修し終えたあと、京都に滞在している。五月中旬までの「吾妻鏡」は頼朝がすべて丹後局、久我通親のペースで行動していることを証固立てる。

三月十六日 既ニ及ビテ宣陽門院（丹後局の娘）ニ参り給フ

三月二十九日 將軍家、尼丹後二位（高階榮子）ヲ六波羅ノ御亭ニ招請シ給フ、御台所（政子）姫公（大媛）等対面シ給フ。

四月三日 將軍家並ニ御台所、姫公等密々ニ石清水以下ノ黎地ヲ巡礼シ給フト云々

四月十七日、丹後二品局、六波羅ノ御亭ニ参ラル。御台所、姫公等御対面ニ及ブ

四月二十一日 將軍家御参内。マタ宣陽門院ニ参ラシメ給フ。長溝堂七ヶ所ノ事、故院（後白河）ノ遺勅ニ任セテ立テラルベキノ由、コレヲ申シ沙汰シ給フト云々

しきりに丹後局と会い、妻の政子や娘の大媛を紹介している。後白河法皇の所領で、丹後局たちが遺勅させて相続しようとした長溝堂の土地、九条兼実の敕命を撤回させてもいる。

その九条兼実は四月三十日、禁裏へ参内した頼朝と会ったが、「玉葉」は、

頼朝卿ニ謁ス。雜事ヲ談ズ。此ノ日官例ヲ見ル。

通親、上首トナルナリ

甚だ不機嫌な調子で、短く片づけている。

贈物にしても丹後局には砂金三百両や白綬三十端などと氣張るが、兼実には馬二匹だけで「甚だ乏少」と書か

せる。

五月十八日。頼朝は天王寺へ参詣することになった。洛中は牛車で往き、鳥羽から船に乗り、渡部で降りて、そこから再び牛車でゆく、というコースが作られた。その船も九条兼実から命ぜられ、一条能保が用意したのであるが、前日になり突然頼朝は固辞してきた。船旅はやめたのかと言えばそうではない。丹後局の船に乗りこんでしまったのである。

気まぐれからでない。一条能保は頼朝の妹婿だが、その子高能と大媛との縁談がひとところ成立しかかっていたのである。完全に破談となったわけではなく、兼実も能保も一縷の望をつないでいた。その巻き返しを船中の話合いに求めたのだったが、頼朝はきっぱりと拒絶した。

頼朝は鳥羽口から丹後局が待ちうける川舟に乗りこんだ。屋形で囲こい、外見は華麗だったが、舟そのものは安直な棚板構造のものであった。幅の広い板を船側に張り、あとは内側の両舷に差し渡した梁材で支えただけのもの。当時この国の船は外洋向けでも同じ構造だった。鳥羽口あたりは川底が浅かった。川岸を勢子たちが綱で引いてゆくのである。その勢子の前後には警固の武士

が騎馬で陸続と連らなっていた。

三

「まるで人垣のなかを漕いで抜けるみたいでしたよ」
丹後局、高階栄子は往路のさまを高笑のなかで語った。

淀川を渡部まで下って、頼朝や北条政子たちは下船し、天王寺さして去った。それを見送った高階栄子は再び川舟に乗りこんだ。光堂から、わざわざこの渡部まで来ていた明遍は、約束どおり彼女の船に同乗したのだった。

往路のものものしい人数はない。宣陽門院に仕える武士三人と、あとは川舟を漕ぐ勢子が数名いるだけだ。それも、彼らはみんな舷側へ出ている。屋形の内は明遍と高階栄子――

栄子は話題を途切らさずにしゃべり続けている。巧みな話術で聞き飽かさない。

でも、それがかえって明遍には気づまりであった。此方も言葉を発していれば、感情が拡散する。黙りこんだままなので、内側の底深く沈黙してしまふのだった。

＜川舟の中の明遍と栄子＞



感情――

小さな記憶の一点を旋回する螢にも似たときめきであった。その螢とは、十四歳の早乙女と一夜を結んだ折の微光。

明遍はその遠い微光を凝視して、胸底に重苦しい結晶のようなものを造りはじめていた。舷側にもたれ、横坐りになった四十女の肢体に目くらみそうにさえなった。

「將軍家の姫君は暗いお方です」

「暗いお方……」

やっと言葉をさしはさめる話題をえらんでくれた。栄子は大媛の印象に触れた。

「さよう。とても幸福を手に来るそうにないお方でした」

「あれでは帝がお可愛そうです。帝までが暗くなってしまわれます」

「では、このたびのご縁談は」

「むずかしいでしょうね」

「むずかしく、あなた方がしてしまうのでしよう」

関白兼実を押しつけて、強引に縁談を餌に武家の棟領を引き寄せた栄子たちだが、その本心は縁談をこわそう

とするのであったか。

食言……と、栄子は気づいたようだ。明遍を見つめる
眼に鋭いものが走った。目下の段階でそんな本心を他人
に覗かせてはならなかった。すべてが瓦解してしまうの
である。

「あるとき、わたしは十五、いや十六歳でしたか」

俄かに話題を転じてくる。

「……」

嘘を言え。未だ十四歳になったばかりだったのに。

「わたしは何にも知りませんでした。ただ小禅師さまを
お慕しいと思っただけで無我夢中だったのでございま
す」

「……」

余り上等とは言えぬ公卿屋敷の一室で、栄子は性をむ
さぼりつくしていたではなかったか。

「かさねて頂きたいと願っていましたが。小禅師さま
は、あれきりお立寄り下さいませんでしたわ」

流し目で男を見る。横坐りの裾が、思いなしかやや乱
れてきた感じた。

話題を俄に転じ、遠い思い出話へ回帰させた魂胆はわ

かっていた。さつき覗かせた栄子たちの本心を、その策
謀を明遍に忘れさせるためだった。

女の手くだと承知しながらも明遍は時間を二十数年昔
へ押し戻そうとつとめる。すでに胸底で結晶したもの
は、何かで溶解し、飛散させねばならぬまでに重量を増
していた。

「……」

言葉は一語も洩れず、明遍の腕だけが水面を走る蛇の
ように伸びた。栄子の手首にからんだ。

「ああ、こんなに日をおいて、小禅師さまはおかさね下
さるか？」

「さねるも、かさねないも……」

膝でいざっていった。

栄子は倒れながら、舷側に垂れた薄布を引いた。屋形
のうちの密室にかえた。

地獄だった。

栄子の肉体に触れた瞬間、明遍はそう実感した。

忌まわしい地獄、ではないのである。ひとたびその扉
口に触れたら、底の底まで引きずりこまれずにはおれな
い快楽の地獄であった。

栄子の肉体は若かった。いや、近年不犯の明遍には、もはや女の老若を感じ分ける機能を失っている。操られるだけなのである。

いや、栄子を若くさせたのは、明遍自身の肉体だったかも知れない。破戒の解禁はつねに青春を回復させる。女体はつねに、相手かまわずにそんな脱衣婆の立場を願望するものだった。

すでに二人は墮性だけで抱擁し合っていた。青春は去って、なま臭い男女の体臭が密着し合った皮膚のあいだに立ちこめた。

「明遍さまは、三井寺の澄憲僧正とご兄弟なんでしょう」

「うむ」

「お願いがございますの。是非一度親しくお会いしたいのです」

「会って……」

「座主さまのことで相談しなければなりません」

早くも栄子の関心は政談に集中していた。

「座主のことなら澄憲僧正などよりは法親王の方が」

明遍は、後白河法皇の在世中から密通をかさねていた

栄子の愛人梶井門跡の名を口にした。

笑いが、それも思いきり下卑た哄笑が舷間にこだました。

「あのお方は駄目でございます。何をやらせても駄目でございます。それと、座主さまはおかり頂ければなりません。そのためには澄憲僧正のお力が要ります」

天台座主は顯真僧正がすでに寂し、九条兼実の実弟慈円僧正が補せられていた。その慈円を引きずりおろそうと高階栄子は企らむのである。二十数年昔の仲に、ヨリを戻して肉体を提供した目的もそこにあったのか。

「明日でもよろしいんでございますのよ。わたし光堂へおうかがい致しましょう」

「いや、わしの方から……」

明遍は息苦しくなりながら言葉を綴った。世捨て人の肌に、べたべたと俗塵がまつわりついてきたのだった。

高階栄子とは、二度と会うまい。

川舟が鳥羽口まで戻り、美しい夕焼けの遠望しつつ栄子と別れた途端、明遍は決意を固めた。なまじ京都にいるからいけないのだ。明日にでも高野山へ逃げるんだ、蓮華谷にこもっていれば、すべての俗塵から解放される

はずだった。

高野山へ旅立とうと早朝に起き出た明遍だが、空を見上げて迷った。昨日の夕焼をどこかへ置き忘れてもしたように、重い雨雲がたれこめ、しぶとい雨が降り出しているのだった。

「明遍僧都はおられるか。おられるなら、返事をなさい」

境内の方で野太い声が、がなり立てている。

うす気味悪くなり、返事もしないで明遍は光堂を出て、境内を見渡した。山門の下に大男が立ちはだかっている。黒衣を乱雑に着こんだひじりである。

その顔を確認して、明遍はやっと声を発した。

「熊谷どのではないか」

「やあ明遍僧都。やはりここであつたか」

ずいぶん乱暴な訪問の仕方だが、坂東武者ならやりそうなことでもある。

大声でわめき散らしておいて、しかし熊谷は格別用件があつて来たものでもないらしい。光堂のなかへ招じ入れると、

「此方に僧都がお住まいと聞いてな。俄かにお顔が見た

くなった」

それだけのことだった。

しかし陰雨に降りこめられ、高野行きも諦めかけていた。所在ない今日一日、この熊谷蓮生坊と付合うのも悪くはあるまい、と明遍は思った。

昨日、丹後局からもらった茶をいれると、熊谷はうまいように飲んだ。

「今すぐその先でな、妙な坊主を見かけた」

と、熊谷は路傍での見聞を語り出すのだった。

(つづく)

寺内大吉先生の連載『念仏ひじり三国志——法然をめぐる人々』は、いよいよ快調に進行中です。筆者の寺内先生も、諸資料を縦横に駆使して、ますます充実した筆運びを展開されています。愛読者の皆様からの激励の便りも二、三届られています。ありがとうございます。感想をお待ちしています。

(編集部)

二 編集後記 二

○世界的な気候異変は、なにやら不吉な予兆とも受け止められる。この冬、北米を中心に襲った寒波はまことに厳しいものであったようで、多くの死者を出した。いつもは雨の降る地方で旱魃が起って作物に多大な害を及ぼしたり、逆に集中的な豪雨を浴びて土砂崩れなどの思わぬ災害に見舞われた地方もある。火山の爆発や大地震の突然の襲来は、わが国の近時の実例を挙げるまでもない。まさに地球史的な視点において、こうした自然現象の不安な動きに対してはおのずから心を配らなければならない。

○そうした中で、わが国の冬は「暖冬異変」ということではじまったが、それでも正月以来東京近郊にも大雪が降り、二月に入って寒さは次第に厳しくなってきたようである。不況不況のうちに暮れて明けた昭和五十三年の胎動は、この寒風に人々の身と心とをことのほか突き刺すようなもので

ある。そんな折、人々が正月の「初」行事や旧来のおめでたい年中行事などにこぞって参加し、神仏の加護をひたすらに求めようとするのは、まことに自然な心の発露でもあるだろう。すがり頼るべき存在が、いやがうえにも危しく不安定になって行く今日、私たちが想いを馳せるのは、私たち人間が長く培ってきた伝統の習俗の中に見出す心の在所でもあるうか。

○二月八日は「針供養」の日。一家の女衆もこの日ばかりは針仕事を休んで、日頃使った古した折れた針や錆びた針を、とうふやこんにゃくなどにそれぞれ刺して、紙や布切れに包んで川などに流し、あるいは寺社の供養塚などに納めて、この小さな針一本に対して感謝のまごころを向けるのである。私は、炉辺で絹縫う母のやさしい姿を想い浮かべて、小さなものごとに感謝する気持ちに改めて心に期したのである。

指突いた針もまじへて供養かな 小波
供養針納める母に手を合わす ゆう一

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四巻 二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十三年 一月二十五日 印刷

昭和五十三年 二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

《出版目録》

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗宗務支所内
 浄土宗出版事業協会

種 別	書 名	規 格	定 価	送 料
浄土選書	① 松濤弘道著 『仏教的生き方とは?』 やさしく人生の歩み方を教える理論 と実践のハンドブック	新書判 268頁	480円	120円
	② 石上善応著 『仏像——その語りかけるもの』 わが心の反映としての仏像の美を見 つめる新しい思索の書	新書判 200頁		
	③ 藤井実応著 『善導大師——生涯と金言』 「古今楷定」の教義の根源を探り、 教化の実態に迫る啓蒙書	新書判 190頁		
	④ 宮林昭彦著 『仏教とその流れ』 仏教とその歴史をやさしく説いた解 説書	新書判 208頁		
美術雑誌	『芸術浄土』② 特集 浄土宗の国宝・魂のふるさと 嵯峨野ほか	B 5 判 120頁	980円	160円
	『芸術浄土』③ 特集 浄土宗の国宝(鎌倉篇)・鎌倉 をあるくほか	B 5 判 84頁	880円 1000円	(送料共)
布教シリーズ	①浄土宗の葬祭 (梶原重道著) ③法然上人のおしえ (竹中信常著) ⑤仏前結婚式—その意義と式次第— (後藤真雄著) ⑥無常にめざめよ—善導大師の教え から— (安居香山著) ⑦二河白道—善導大師の教えから— (上田見宥著)	B 6 判	1部40円 300部以上38円 500部以上35円 送料実費	
	④月影の歌 (岸信宏貌下著)	B 6 判 32頁	1部60円 300部以上55円 500部以上50円 送料実費	
仏教事物解説 カード	①浄土宗 ②南無阿弥陀仏 ③三宝 ④仏壇 ⑤勤行 ⑥お灯明 ⑦数珠 ⑧木魚 ⑨檀家 ⑩中陰	ハガキ判	100部 800円 500部以上 100部 700円 送料実費	
	『浄土伝燈輯要』全一卷 伝燈諸列祖研鑽の一大集裁として明 治初年発刊の和綴三巻を一本として ここに再版	A 5 判 1074頁	7000円	280円
	ポケット判 『浄土宗寺院名鑑』	A 6 判 364頁	1500円(送料共)	
	『浄土宗教師必携』 附1987年教師手帖 資格分限ほか取得事項記入欄、主要 宗規宗綱を掲載	A 6 変型判 本草表紙 本体 120 頁 手帖 124 頁	1500円(送料共) 手帖のみ 600円(送料共)	

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
 昭和五十二年一月二十五日印刷 昭和五十二年二月一日発行
 第四十四巻 第二号